

エヴァグリオスのシリア語およびアラビア語による伝承について

——『祈りについての一五三の断章』を例に——

一 はじめに

二〇世紀以降の学会におけるエヴァグリオス（三四五年～三九九年）の再評価は作品のシリア語訳の存在なしにはありえなかった。没後にオリゲネス主義者として異端視され、五五三年の第二コンスタンティノポリス公会議で断罪されたエヴァグリオスの作品は、原文のギリシア語ではその多くが散逸し、伝存する作品も多くの場合エヴァグリオスの作品としてではなく、アンキユラのネイロスら他の著者の作品として伝わった。エヴァグリオスの著作は早い時期にラテン語にも翻訳され、ゲンナデイウス（四九六年没）

高橋 英海

の時代には『修行論』や『グノースティコス』、『アンティレーティコス』などの主要な作品のラテン語訳が存在していたことが知られているが、近世以前のエヴァグリオス作品のラテン語訳で写本でもエヴァグリオスに帰されて残っているのは『修道士宛命題集』と『処女宛命題集』の訳のみである¹⁾。これに対して、シリア語訳では聖書註解を除くエヴァグリオスのほとんどの作品が残されており、エヴァグリオスの著作の全容はシリア語訳の研究によって初めて明らかになったと言える。さらに、一部の例外を除いてシリア語訳はエヴァグリオスの作品として伝わっている。これはシリア語圏のキリスト教徒の多くがエヴァグリオス

が異端者として断罪される一世紀前の五世紀半ばに「帝國教会」と袂を分かつたため、すなわち、シリア語を用いるキリスト教徒のほとんどの間ではエヴァアグリオスは異端者とされることになつたためであるが、これらのシリア語訳の存在はギリシア語ではネイロスらに帰されていた作品が実はエヴァアグリオスのものであるとする際の証拠を提供することともなつた。このほかに、シリア語訳の写本の中にはギリシア語の写本よりも格段古いものが残っており、ギリシア語原文の本格的な校訂にはシリア語訳との照合が欠かせないことや、シリア語訳がアラビア語訳やアルメニア語訳の多く、さらにはソグド語訳の基ともなつたことも忘れてはならない^②。このようなシリア語訳の重要性に鑑み、本稿ではエヴァアグリオス作品のシリア語訳およびそれと密接に関わるアラビア語訳の概要を紹介した上で、『祈りについての一五三の断章』（以下『祈りについて』）を例に作品のシリア語およびアラビア語での伝承について多少の考察を試みたい。

二 エヴァアグリオス作品のシリア語訳およびアラビア語訳の概要

エヴァアグリオスの作品のシリア語への翻訳が開始したのは、著者の没後一世紀余りを経た六世紀初頭のことと考えられる^③。古いところではマップーグのフィロクセノス（五三三年没）の『パトリキオス宛書簡』にエヴァアグリオスの『修行論』および『グノースティコス』からの引用があるほか、フィロクセノスの他の作品にも随所にエヴァアグリオスの影響が見出されており^④、フィロクセノスはギリシア語を読めなかつたとされていることから、この時期にすでに作品のシリア語訳が存在していたものと推測される。現存する最古のシリア語訳写本としてはセレウコス暦八四五年（西暦五三三／四年）に書写された大英図書館所蔵追加写本（Additional）一二一七五があり、この他にも六世紀から七世紀にかけて成立した相当数の写本が知られている^⑤。

シリア語写本でエヴァアグリオスの著作集をもつとも完全な形で残しているのは七世紀に書き写されたものと考えられる大英図書館所蔵追加写本一四五七八である。この

写本ほど多くのエヴァグリオスの著作を収録したものは他にはないが、ある程度の数の著作をまとまった形で収録した写本としては九世紀および一〇世紀のものが複数あるほか、一二世紀、一三世紀のものも少なくとも一つずつ存在することが確認されており、それぞれの時代にエヴァグリオスの作品が読み継がれていくことがわかる。特に一三世紀の大英図書館所蔵追加写本七一九〇（北イラク起源）には八世紀以降それまでの間の時代のいずれの写本よりも数多くの作品が含まれており、一三世紀後半にイラク北部のモスールを中心起こったことが知られているエヴァグリオスの著作への関心の高まりとも関連して注目に値する⁶⁾。また、この数年の間に調査が行われたトルコ・マルテインの四〇人殉教者教会所蔵の写本などの中にもエヴァグリオス作品のシリア語訳を含むものが複数確認されており、今後さらさら新たな写本が発見される可能性がある⁷⁾。

このような形でシリア語訳で残されている作品のうち、ギリシア語原文では失われてしまったものとしては、『アンティレーティコス』、『メラニア宛書簡』、『祈りについての三章』、『セラフィムについて』、『ケルビムについて』、

『書簡集』などがある。また、エヴァグリオスの主著と言える三部作のうち『修行論』はネイロスの名の下でギリシア語でも伝わっているが、『グノースティコス』および『グノースシ的諸章』はギリシア語では断片的にしか残っておらず、三部作の全体像、ひいてはエヴァグリオスの思弁神学の全体像はシリア語訳をとおしてのみ知ることができる。

現存する写本で追加写本一四五七八のようにエヴァグリオスの作品のみを収録した写本は比較的少なく、エヴァグリオスの作品は通常は修道文学作品を集めた写本に他の著作家の作品とともに収録されている⁸⁾。それぞれの作品を収録した写本の数という点では神学的な作品よりは修道性・靈性に関わる作品の方が数が多いのはこのような伝存形態からも予想されるとおりであるが、前者の部類に入るものの中でも『グノースシ的諸章』は少なくとも八つの写本が知られている（ただし、このうち、七つは異端的な部分を削除した縮約版S₁の写本、完全版S₂の写本は追加写本一七一六七のみ）。

エヴァグリオスのシリア語における受容について述べる際には、作品の翻訳以外にも作品の註解やその他のエ

ヴァグリオスの影響を受けた著作について考慮する必要がある。このような形で受容についてここで詳述することはできないが、作品の註解としては東シリア教会（いわゆる「ネストリオス派」）の大ババイ（五五一年頃～六二八年）とシリア正教会のディオニシオス・バル＝サリービ（一一七一年没）による『グノーシスの諸章』の註解を挙げる事ができる⁹⁾。マツプーグのフィロクセノスにおけるエヴァグリオスの影響については先に述べたとおりだが、例えばほぼ同時代のレーシユ＝アイナーのセルギオス（五三六年没）の『靈的な生について』にもエヴァグリオスの影響を見出すことができる¹⁰⁾。エヴァグリオスは東シリア教会最大の靈性家と言えるニネヴェエのイサク（シリア人イサク、七世紀末に活躍）にも大きな影響を与え、その影響はイサクの作品のギリシア語への翻訳をとおしてギリシア語世界へと逆輸入されることとなった¹¹⁾。これらは主にエヴァグリオスの靈性の受容に関わるものだが、エヴァグリオスの思弁神学を受容し、その汎神論的性格をさらに強めた作品としてステファノス・バル＝スタイリー（六世紀前半）の『ヒエロテオスの書』がある¹²⁾。『ヒエロテオスの書』の異端的な要素を削除した縮約版を著し

たバル＝エブローヨー（バルヘブラエウス、一二五〇/六一二八六）は、その自伝の中で自分がエヴァグリオスを初めとする「知者たち (yaddur'fane)」の書物に出会った後に七年間にわたって思い悩んだと述べているが¹³⁾、このバル＝エブローヨーの著作にもエヴァグリオスの著作からの引用を数多く見出すことができる¹⁴⁾。

ここでは、エヴァグリオスの作品がシリア語にどのような形で伝わったかを垣間見るために、シリア語で残る作品のほほすべてを含む¹⁵⁾大英図書館所蔵追加写本一四五七八の内訳を示しておく¹⁶⁾。以下では、各項目の中で、まず「」内に写本にあるシリア語の題名を直訳し、『』内に該当作品の通常の名称、次いで *Clavis Patrum Graecorum* (=CPG) における項目番号¹⁷⁾、写本内での位置を記した。「偽」とあるのは、偽作（ないし疑作）である。

1. エヴァグリオスの伝記 (= *Historia lausiaca*, cap. 38: 1r-2v)

二〜三. 「砂漠にいる隠修士の兄弟たちへの教え」
〔「修行論」および「グノーステイコス」〕^{CPG2430,}

2431: 2v-16v)

- 四 「修道士エウロギオスに宛てた教えの論」(『エウロギオスに宛てて』¹ CPG2447: 16v-34v)
- 五 「八の想念についての諸論」(『アンティレーティコス』² CPG2434: 34v-77r)
- 六 「同じ八の情念とその治療についての論」(『八の悪しき靈にうつて』³ CPG2451: 77r-82r)
- 七 「第二の論、すべての神への畏れの習慣に相反して起る諸々の想念にうつて」(『スケンマタ』⁴ (CPG2433: 82r-92r))
- 八 「第三の論、想念の区別にうつて」(『スケンマタ』⁵ 92r-93r)
- 九 「第四の論、想念についての要約」(『スケンマタ』⁶ 93r)
- 一〇 「修道院とともに住む修道士たちへの勧告の言葉」(『修道士宛命題集』⁷ CPG2435: 93r-97r)
- 一一 「修道性とそこへの静寂がいかにして獲得されるかにうつて」(『修道士の修業の基礎』⁸ CPG2441: 97r-102r)
- 一二 「義者と完徳者にうつて」(偽 = *Liber graduum*,

hom. 14, CPG2465: 102r-103r)

- 一三 「第一六の論、修道性の静寂がそれによって確立する徴にうつて」(偽 = CPG2469: 103r-104r)
- 一四 「情念についての勧告」(『悪しき想念にうつて』⁹ CPG2450: 104r-v)
- 一五 「謙遜にうつて」(偽 = *ペトレハムのマルキアノス作* CPG2466: 104v-107r)
- 一六 「第二〇の論、勧告にうつて」(『修道士宛勧告』¹⁰ (*Paranesis ad monachos*))¹¹ r CPG2454: 107r-v)
- 一七 「勧告にうつて」(『修道士宛勧告』¹² II¹³ 107v-109r)
- 一八 題名なし (偽 = 『断食にうつて』¹⁴ CPG2467: 109r-110r)
- 一九 「勧告にうつて」(『勧告的忠告 (*Admonitio parenetica*)』¹⁵ CPG2472: 110rv)
- 二〇 「ソロモンの箴言とたとえ話の註解」(『箴言註解』¹⁶ CPG2457: 110v-111r)
- 二一 ~ 二二 「靈魂の情念の定義」(『三三の断章』¹⁷ CPG2442: 111r-112r)
- 二三 「第二八の論、祈りについての諸章」(『祈りに

- 一三「*レ*」CPG2447; 112r-113v)
- 二四「*レ*勸告」(偽『*レ*勸告 (Paranesis)』CPG2475; 113v-114v)
- 二五「*レ*教師たちと弟子たちへの論」(偽、ネイロス『*レ*教師と弟子に*レ*』CPG2449 = 6053; 114v-115v)
- 二六「*レ*第二九の論、師と弟子」(偽『*レ*師の弟子との対話』CPG2470; 115v-116r)
- 二七「*レ*格言集」(CPG2443-2445; 116r-117r)
- 二八「*レ*題名なし(『*レ*悪しき想念に*レ*』CPG2450; 117r-118r)
- 二九「*レ*セラフィムに*レ*」(CPG2459; 118rv)
- 三〇「*レ*ケルビムに*レ*」(CPG2460; 118v-119r)
- 三一「*レ*隠修士たちの訓育と教育のために語られた知の諸章に*レ*」(『*レ*タノーシスの諸章』CPG2432 [S.J.]; 119r-144r)
- 三二〜三四「*レ*知の諸章に*レ*」(『*レ*スケンマタ』、『*レ*エヴァグリオスの弟子たちによる一九九章』、『*レ*完徳に*レ*』(偽)より、CPG2433, Suppl. 2483, 2476; 144r-148r)

- 三五「*レ*神のうちに生きる者の忠告」(『*レ*エヴァグリオスの弟子たちによる一九九章』第一九七章、CPG Suppl. 2483; 148rv)
- 三六「*レ*知性の勸告について」(同右、第一九八章、148v)
- 三七「*レ*第三八の論」(『*レ*タノーシスの諸章』補遺(偽) 四四〜五七章、148v-149r)
- 三八「*レ*静寂に*レ*」(偽、CPG2468; 149r-v)
- 三九「*レ*祈りに*レ*」(『*レ*祈りに*レ*』の三章)CPG2453; 150rv)
- 四〇〜四一「*レ*たとえ話と註解」(偽、CPG2477; 150v-152r)
- 四二「*レ*エジプトの隠修士の服装について教えるよう願ったアナトリオスへの(書簡)」(『*レ*アナトリオス宛書簡』CPG2430; 152r-153v)
- 四三「*レ*勸告に*レ*」(偽、ナトファルのアブラハム、CPG2480; 153v-155v)
- 四四「*レ*勸告に*レ*」(偽、ナトファルのアブラハム、CPG2480; 155v-158v)
- 四五「*レ*処女への書簡」(『*レ*処女宛命題集』CPG2436;

158v-160r)

四六: 「書簡集」(『書簡』六二) CPG2437; 160r-187r)

四七: 「メラニアへの書簡」(CPG2438; 187r-193v)

四八: 題名不明(冒頭欠落) (CPG2480; 194r-195v)

エヴァグリオスの著作のアラビア語訳をまとめた形で収録した写本としては、フランス国立図書館所蔵アラビア語写本一五七(一四世紀)、バチカン図書館所蔵アラビア語写本九三(一四世紀)、アンバー・ビシヨイ修道院旧蔵)、コプト教会総大司教座所蔵本(番号不明、一七六四年書写)、コプト教会総大司教座旧蔵本(現在地不明)、ワーディー・アン・ナトルーン(スケーティス)のシリア人修道院(ダイル・アツィスルヤーン)所蔵写本一七四(この写本に基づくタイプライターおよび手書きによる「刊本」あり)、同聖マカリオス修道院(ダイル・アブー・マカール)所蔵本(一九五七年書写)の六写本が知られている⁽¹⁸⁾。これらの写本はすべてコプト教会起源のものであり、作品集の内容はほぼ同一である。ここでは、フランス国立図書館所蔵本に基づいて作品集の内容を示しておく⁽¹⁹⁾。なお、作品名

については一部バチカン本(=V)から補った。

- 一. 「師父 (amba) 聖エヴァグリオスの師父聖ルーキオスからの手紙への返答」(『ルーキオスのエヴァグリオスへの手紙』、アラビア語でのみ残存、2v-3r)
- 二. 「師父聖エヴァグリオスの師父聖ルーキオスからの手紙への返答」(『エウロギオスに宛てて』、CPG2448; 3r-31r)
- 三. 題名なし(『徳に相反する悪徳に』) (CPG2448; 31r-35v)
- 四. 「独居 (takarrud) および神との対話である祈りに』) (『祈りに』の一五三章) CPG2452; 35v-53r)
- 五. 題名なし⁽²⁰⁾ (『修行論』) (CPG2430; 52r-71r)
- 六. 「八の想念 (afkar) への返答」(『修行論』、CPG 2434; 71v-136r)
- 七. 「また、八の想念について」(『八の悪しき靈について』) (CPG2451; 136r-153r)
- 八. 「諸々の想念について」(V)⁽²¹⁾ (『悪しき想念について』) (CPG2450; 153r-163r)

九. 『コヘレト』に似た言葉、『雅歌』に似た言葉

(V)、『ソロモンの『箴言』から』(V) (CPG2464, 2463, 2464a; 163r-165v)⁽²¹⁾

一〇. 題名なし (『修道士宛命題集』、CPG2450; 165v-173v)

一一. 題名なし (『主祷文註解』、CPG2461; 173v-174v)

一二. 題名なし (『アナトリオス宛書簡』、CPG2430; 174v-175r)

一三. エヴァアグリオスの伝記 (= *Historia lausiaca*, cap. 38; 175r-178r)

このフランス国立図書館本その他の写本群に残るアラビア語訳作品集はシリア語訳の作品集よりはかなり小規模なものであり、主要作品の中でも『グノーシスの諸章』、『グノーステイコス』、『スケンマタ』、『書簡集』、『処女宛命題集』などが欠落していることがわかる。これらのアラビア語訳がギリシア語から直接翻訳されたものか、シリア語訳ないしコプト語訳を経たものかは定かではない。後述のとおりオーセールはこの写本群に含まれる『祈りについて』

のアラビア語訳をシリア語訳からの翻訳と考えたが、『修行論』、『想念について』のギリシア語テキストの校訂にアラビア語訳を用いたギョーモン (Claire Guillaumont) およびジェアンは、少なくともこの二つの作品のアラビア語訳はギリシア語からの直接の翻訳であるとしている⁽²²⁾。

アラビア語では、これらコプト教会起源の写本に見られる訳とは別に、『エウロギオス』、『悪しき想念について』、『アンティレーティコス』の訳 (おそらくシリア語経由) がレバノンのダイル・アル＝バナート修道院旧蔵本 (現在地不明) に、『グノーシスの諸章』の訳 (おそらくシリア語訳 S₁ からの翻訳) がコプト教会総大司教府旧蔵本 (*Theologie* 152, 現在地不明) にあったことが知られているほか、『八の悪しき霊について』の訳 (翻案、コプト語経由?) および偽作『師の弟子との対話』の訳 (シリア語経由) がコプト教会ないしシリア正教起源の写本でエヴァアグリオスの作品として伝わっており、さらには、『八の悪しき霊について』、『処女宛命題集』、『祈りについて』の訳がメルキト教会起源の写本にネイロスの作品として残っている。

تجعل اقامة العقل تكون بغير قلق وتجعله قابل للتوزيع الحسن عندما
توسط به هذه القضايا في اوقات الصلاة

الحق والبرية ومع عدم حصوله من القلب
صالحه من القلب والبرية. محصله ان القلب
صالحه من القلب والبرية.

انما ما تفتت النفس من اجل تمام الرضا لا متحرك الطمس
العقل تهيب وقبول الاشكال المطورة تصيره

H h yabe abbā waqri la'amma našhat nats
ba-magbār šannāyət, yakawwan labb za-'anbala
hukat, wa-yakawwan labb wasta ḥad'at gize salot,
yakawwan kama za-yahnāgaro la-'agzi'abher.

希 諸々の掟 (M 徳) の満たしによって浄められ
た靈魂は、知性の秩序を揺るぎないものとして備え、
知性を求められる状態を受け容れるものとする。

シリ A 靈魂は諸徳の完成によって浄められると、
知性を傾きのないものとして確立し、求められている
状態を受け容れられるものとする。

アラ A 靈魂は (上で) 言及したこれらの徳の完成
によって浄められたとき、知性の存立 (iqāma) を揺

るぎないものとし、祈りのときにこれらの諸徳が (知
性) を囲むことで、(知性) を善・美 (ḥusn) の確立
を受け容れるものとする。

シリ B 靈魂は掟の満しをおして浄められたとき、
知性の秩序をぐらつきのないものとして備え、それを
求められる状態 (qatasīsis) を受け容れるもの
とする。

アラ B 靈魂は掟の完全性をおして浄められたと
き、知性の秩序を不動のものとして備え、それを求め
られる諸形状を受け容れるものとする。

エチ 師父エヴァグリオス曰く、もし靈魂が善の行
いをおして浄められたときには、知性は動揺のない
ものとなり、知性は祈りのときに静寂のうちにあるよ
うになり、あたかも神と対話しているかのようになる。

ここで、シリ A 語訳 B とアラビア語訳 B はともにフィロ
カリ A 版のギリシア語に比較的近く、原文の「備える」と
いう動詞も忠実に訳そうと試みている。これに対して、シ
リア語訳 A およびアラビア語 A で「掟」に代わって「徳」
とあるのはミーニユ版に通じる。シリ A 語訳 A の「傾きの

なる」は、シムーン版にある aklonētōn を akinēn と読んだことに由来する可能性がオーセールによって指摘されているが、これはアラビア語訳 A には反映されていない。

エチオピア語訳で「求められる状態」が「静寂」に置き換えられ、「神との対話」の概念が付け加えられているのは他の訳にはない点だが、「善の行い」とあるのはシリア語訳 A およびアラビア語訳 A の「徳」に通じ、「祈りのとき」の追加はアラビア語 A に同じである。エチオピア語訳の該当箇所は「祈りについて」の第五章とともに師父たちの言葉の集成に採録されたもので、直接はアラビア語訳 A からではなく、アラビア語における類似の集成からの翻訳であろうが、少なくともアラビア語訳 A と共通の伝承経路を有する可能性が高い。

シリア語訳 A およびアラビア語訳 A のそれぞれの性質およびギリシア語原文との関係について考察を加えるために、特徴的な箇所をさらにいくつか挙げておく。

第一章 ei tis bouloito to euōdes thymiana

skenasai, ton diaphanē libanon kai tēn kassian

kai ton onycha kai tēn staktēn exisou synthēsei

kata ton nomon. tauta de estin hē tetras tōn
aretōn. ean gar plērestatai kai isai tygchanōsin,
ou prodothētai ho nous.

ⲉⲓ ⲧⲓⲥ ⲃⲟⲩⲗⲟⲩⲧⲟ ⲧⲟ ⲉⲩⲟⲩⲁⲥ ⲧⲏⲙⲓⲁⲛⲁ
ⲛⲓⲕⲁⲛⲁⲥⲁⲓ ⲛⲟⲛⲟⲛ. ⲧⲁⲩⲧⲁ ⲉⲥⲧⲓⲛ ⲛⲉ ⲧⲉⲧⲣⲁⲥ
ⲧⲟⲛ ⲁⲣⲉⲧⲟⲛ. ⲉⲁⲛ ⲓⲥⲁⲓ ⲧⲩⲕⲭⲁⲛⲟⲥⲓⲛ,
ⲟⲩ ⲡⲣⲟⲩⲗⲉⲧⲁⲓ ⲛⲟⲩⲥ.

ⲉⲓ ⲧⲓⲥ ⲃⲟⲩⲗⲟⲩⲧⲟ ⲧⲟ ⲉⲩⲟⲩⲁⲥ ⲧⲏⲙⲓⲁⲛⲁ
ⲛⲓⲕⲁⲛⲁⲥⲁⲓ ⲛⲟⲛⲟⲛ. ⲧⲁⲩⲧⲁ ⲉⲥⲧⲓⲛ ⲛⲉ ⲧⲉⲧⲣⲁⲥ
ⲧⲟⲛ ⲁⲣⲉⲧⲟⲛ. ⲉⲁⲛ ⲓⲥⲁⲓ ⲧⲩⲕⲭⲁⲛⲟⲥⲓⲛ,
ⲟⲩ ⲡⲣⲟⲩⲗⲉⲧⲁⲓ ⲛⲟⲩⲥ.

(1) 𐌹𐌶𐌰 𐌲𐌰𐌿𐌴𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌲𐌰𐌿𐌴𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰

(2) 𐌹𐌶𐌰 𐌲𐌰𐌿𐌴𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰
𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰 𐌰𐌹𐌶𐌰

希 よい香りの香料を準備しようとする者は、律
法に従って、同量の透き通った乳香 (libanon) と
桂 (kassia) とオニユクス香 (onyx) とスタクテー
(stakte, 蘇合香) を混ぜ合わせるであろう (出エ三
〇・三四参照)。これらは四つの徳である。それらが
完全であり、均等であるならば、知性が裏切られるこ
とはないからである。

シリ 香しい香料を準備しようとする者は、律法が命じているように、桂 (qasya) と乳香 (lbuntā) とオニユクス香 (tepra, 瓜) を、スタクテー (estaqte) と、等しく配合するであらう (するがよい)。これらは四つの徳である。それらが完全性において等しくならなければ、知性は裏切られる。

アラ (一) 香 (tib) を準備し、きちんこ¹ ようとする者は、乳香 (lubān)、没薬 (murr)、桂 (salikha)、蘇合香 (may'a) などの(香)の薬剤を集めて、等しい分量で混ぜ、上昇させなければならぬ。(二) 私たちはこの霊的な意味を理解する。それらは集められる四つの徳、すなわち、心の謙遜 (tawadu' al-qalb)、信仰、希望、愛だからである。そして、これらが靈魂の中で等しさにおいて完全であり、(靈魂) がそれらに満たされているときには、知性は欺かれない。

ここでのシリア語訳では、「ならなければ、裏切られる」という部分で否定辞の位置がギリシア語と異なっているが、意味上の大きな相違はない。これに対して、アラビア語訳

では一つの章が二つに分けられている上に、内容も大幅に敷衍されている。

第八章 polloi dakryontes hyper hamartion,

epiathomenoi tou tôn dakryôn skopou, manentes
exetrapēsan (exetrapēsan M.).

(7) *موتروا في دموعهم ولم يتركوا*
الدموع. صعدوا رطبا.

(8) *كثيرون بكوا على خطاياهم ولما تبسروا*
وصعدوا في دموعهم القلب.

希 多くの者たちは、罪について涙しつつ、涙の目的を忘れ、気が狂い、道から外れた。

シリ (七) 多くの者たちは、自分たちの罪について泣きつつ、涙の目的について誤ったため(誤ったとき)、狂気に撃たれた。

アラ (八) 多くの者たちは、自分たちの罪について泣いて、涙の管理を怠ったとき、それ(涙)を失って、心の驚き (damsat al-qalb) に陥った。

ら)でミーニユ版にある *ekplēssō* という動詞は、言うまでもなく接頭辞 *ek-* と「撃つ」を意味する *plēssō* からなる言葉で、「撃つて外に追い出す」という意味のほかに、「驚かせる」という意味もある。したがって、ここでのシリア語訳とアラビア語訳はともにミーニユ版にある読みに従っている可能性が高い。ただし、同じ動詞の両者における解釈は異なる。さらに、アラビア語訳にある「心の驚き」という表現は注目に値する。第一章のアラビア語訳(アラビア語訳では第二章)にも「心の謙遜」という表現が見られたが、このような「心」という単語を含む熟語的表現は、シリア語ではなく、むしろコプト語に特徴的な表現であり⁽⁸⁾、ここでのアラビア語訳がコプト語訳に基づく(あるいはコプト語に慣れ親しんだ翻訳者によるものである)可能性を示唆するからである。

- 第一四〜一六章 (14) *proseuchē esti praiotētōs kai aorgēsias blastēma*. (15) *proseuchē esti charas kai eucharistias problēma*. (16) *proseuchē esti lypēs kai athymias alexēma*.

- (14) *rahā rāḥaḥo rāḥaḥo rāḥur rāḥā y (14)*
rahā rāḥaḥo rāḥaḥo rāḥur rāḥā y (15), *rāḥaḥaḥo i*
rāḥaḥo rāḥaḥo rāḥur rāḥā y (16), *rāḥaḥo*
rāḥaḥaḥo.
 (15) *al-ṣalāḥ al-ḥaqīqīyah fī ḥajab al-waḍāʿah wa-ʿilm al-ḥayb*.
 (16) *al-ṣalāḥ fī ḥajab al-ʿaḥzān wa-ṣayf al-ḥayb*.

希 祈りは柔和と怒りなき状態 (*aorgēsia*) の芽である。祈りは喜びと感謝の発露である。祈りは悲しみと落胆に対する防御である。

シリ 祈りは柔和であり、怒りなき状態 (*lā rguzānūtā*) の発芽である。祈りは感謝を発する喜びである。祈りは悲しみと落胆を滅ぼすものである。

アラ 真の祈りは柔和と怒りの不在 (*ʿadam al-ḡaḍab*) をもたらす (*tajībū*)。祈りは喜びと感謝の門である。祈りは悲しみと胸の狭まり (*diq al-sadr*) の薬でもある。

オーセールは、アラビア語訳の一四章にある「もたら

す」という訳を、翻訳者がシリア語の「である」(tēh) という言葉を「もたらす」(ayth' 母音記号なしの場合の文字の形は同じ)と読んだことに由来すると考えた。しかし、これはそもそも考えにくい誤読である上(シリア語写本で h の文字が欠落して、yṯy [ayt] となっていたならば話は別だが)、その場合は、一四章のみではなく他の二章にも同じように「もたらす」という概念が現れて然るべきであるし、この「もたらす」という言葉は意味上は原文の「芽」に対応するものである。したがって、ここでのアラビア語訳の背後にシリア語訳の影響を想定する必要はない。むしろ、アラビア語訳で一六章にある「胸の狭まり」という表現は第八章で見た「心」を含む表現と同じようにコプト語の影響を示唆する。

第二章 hoi lypas kai mnesikakias heautois epi-
sōreunotes (sōreunotes, et add. kai proseuchesthai
dokountes M.), homoioi eisi tois hydōr antlounei kai
eis pithon tetremenen ballousin.

هوليس يظاس كاي مnesiaكيا كاي هياوتوس اي
سوليس يظاس كاي مnesiaكيا كاي هياوتوس اي
هوليس يظاس كاي مnesiaكيا كاي هياوتوس اي
هوليس يظاس كاي مnesiaكيا كاي هياوتوس اي

الذين يجمعون الايمان وافعال الشرور في نفوسهم في اوقات الصلاة
هو لاي يمشهوا قوم بر يديو يظفوا القل بالخشيش واللين اي يظلمروها
هم هيس يظاس كاي مnesiaكيا

希 悲しみや恨み (mnesikakia) を自らのうちに貯める者たちは (M 貯め、祈っていると思う者は)、水を汲んで、穴のあいた甕に注ぐ者たちに似ている。

シリ 悲しみや恨み (akktanta) を自らの上に集め、祈っていると思う者たちは、水を汲んで、穴のあいた甕に注ぐ者たちに似ている。

アラ 祈りのときに、悲しみや諸悪の思い (akktantia) を集める者たちは、火を草や藁で消そう、すなわち、覆おうとし、(その結果、火が) 勢いを増し、強まるような人々に似ている。

このでも「祈っていると思う」という文言の追加からシリア語訳の背後にあるギリシア語テキストはフィロカリア版よりもミーニユ版のテキストに近いことがわかる。この追加はアラビア語訳には反映されていないが、アラビア語訳では文章の後半でギリシア語およびシリア語訳と比べて

大幅な変更が生じている。また、アラビア語訳にある「諸悪の思い」という表現は、本来は「悪いことを思い出すこと」を意味するギリシア語の *mesikhakia* の翻訳として理解することができるが、これも少なくともシリア語の介在を想起させる訳語ではない。

ここまで『祈りについて』のごく一部の箇所を利用してシリア語訳Aおよびアラビア語訳Aについて検討した。ここで得られた知見は対象範囲を広げてさらに検証する必要があるの言うまでもないが、少なくともここで見たかぎりでは、シリア語訳Aはフィロカリア版よりはむしろミーニュ版の読みと一致することがしばしばあることがわかった。全体としてはミーニュ版よりもフィロカリア版の方が「まし」なテキストであることは確かであり、最近の『祈りについて』の翻訳も概ねフィロカリア版を底本としているが²⁸、シリア語訳Aが写本の年代からして七世紀、すなわち現存するギリシア語写本よりはるかに前に成立していたことを考えるならば、『祈りについて』について論じる際にはミーニュ版に見られる異読も十分に考慮する必要があるだろう。また、シリア語訳Aはアラビア語訳Aと比

べると原文に忠実な訳ではあるが、少なくとも第二章での比較で見えるかぎりではシリア語訳Bよりギリシア語原文からの乖離が大きく、全体的な傾向としては直訳調の翻訳が増える七世紀中頃以前のシリア語訳の特徴と合致する。

アラビア語訳Aについては、シリア語よりはむしろコプト語の影響を示唆する箇所がいくつか見出された。さらに、アラビア語訳Aはここで見たわずかな箇所からもわかるとおり、かなり「自由」な訳であり、意訳というよりはむしろ翻案に近い。このことも全般に忠実な翻訳よりは翻案の多いコプト語との関係を示唆する。

四 おわりに

本稿では、エヴァグリオスの著作のシリア語訳およびアラビア語の概要を紹介するとともに、『祈りについて』のシリア語訳およびアラビア語について——このような翻訳を検討する際にはどのような課題があり、どのような知見が得られるかの紹介を兼ねて——多少の考察を加えてみた。

シリア語を初めとする東方諸言語におけるエヴァグリオ

スその他のギリシア教父の著作の伝承は、翻訳の学術的な校訂版の作成を初めとして、いまだに多くの課題が残る研究領域である。特にエヴァグリオスの場合にはシリア語訳がその作品集全体の再構築に欠かせないことはここで述べたとおりだが、ギリシア語原文が存在する著者や作品の場合でも東方諸言語訳を参照せずに原文の本格的な校訂を行うことはできない。さらに、エヴァグリオスを初めとするギリシア語教父の東方諸言語における受容とそこでの変容についての研究は、ギリシア語圏よりも東の世界、すなわちアジア大陸のギリシア語圏よりもわが国に地理的に近い地域（トゥルフアンで出土したエヴァグリオス作品のソグド語訳の存在を考えるならば、少なくとも現在の中国西部に至る地域）におけるキリスト教の神学と靈性の発展を理解する上でも重要である。今後このような課題に取り組む研究者がわが国においても増えていくことを期待したい。

注

- (1) ラテン語ではこの他に『八の悪の霊について』の訳がネイロスの作品として伝わっている。エヴァグリオスの著作のラテン語訳およびシリア語訳全般については、Columba Stewart, "Evagrius beyond Byzantium: the Latin and Syriac Receptions" (Dumbarton Oaks Round Table "After Evagrius: The Controversial Legacy of Evagrius of Pontus", April 15-16, 2011 にて発表、ラウンドテーブルの論文集に掲載予定) 参照。ステュワート師には刊行前の原稿を送っていた。ここに記して感謝する。

- (2) エヴァグリオス作品のアラビア語訳については以下を参照。アルメニア語訳では『ダノーシスの諸章』、『スケンマタ』(部分訳)、『修道士宛命題集』、『処女宛命題集』、『書簡集』(一部)などがシリア語を介した翻訳と考えられている (Hénée Hausherr, *Les versions syriaque et arménienne d'Évagre le Pontique* [Orientalia Christiana XXII/2], Roma: Pont. Institutum Orientalium Studiorum, 1931 参照)。最近では Edward G. Matthews Jr., "Syriac into Armenian: The Translations and Their Translators", *Journal of the Canadian Society for Syriac Studies*, 10 (2010), p. 20-44 (hic p. 27, 33) がこれらのアルメニア訳の多くが従来考えられていたよりも遅い時期(二二〜二三世紀)

- に成立したものである可能性を指摘している。ソグド語では『アンティレーテイコス』のかなりの部分(全八章のうち、六章の途中まで)がベルリンのキリスト教ソグド語写本C2に残されており、これは明らかにシリア語からの翻訳である(Nicholas Sims-Williams, *The Christian Sogdian Manuscript C2* [Berliner Turfanexite XIII, Berlin: Akademie-Verlag, 1985, p.168-182 参照])。
- (3) エヴァグリオスのシリア語訳全般については、Stewart, "Evagrius beyond Byzantium" および Paul Gehin, "En marge de la constitution d'un Repertorium Evagriannum Syriacum, quelques remarques sur l'organisation en corpus des oeuvres d'Évagre", *Parole de l'Orient*, 35 (2010), p. 285-302 参照。それぞれの作品のシリア語訳に関わる刊本・翻訳・研究書・研究論文については、Grigory Kessel & Karl Pingétra, *A Bibliography of Syriac Ascetic and Mystical Literature* (Eastern Christian Studies 11), Leuven: Peeters, 2011, p. 76-93 の一覧を参照。
- (4) フイロクセノスの作品に見られるエヴァグリオスの影響については、David Michelson, "Phioxenos of Mabbug and the Simplicity of Evagrian Gnosis: Competing Uses of Evagrius in Early Sixth-Century Polemical Theology" (Dumbarton Oaks Round Table "After Evagrius: The Controversial Legacy of Evagrius of Pontus" にて発表) 注
- (5) 六世紀のものとしてされる写本としては、大英図書館 Add. 14635/ Add. 14581、六世紀末ないし七世紀の写本としては、同 Add. 17167/ Add. 14578/ Add. 14616/ Add. 14650 がある。これらの写本は、すべて、他の古い時代のシリア語写本の多くと同様に一九世紀に英国にもたらされるまでエジプトのシリア人修道院(マイル・アッ＝スルヤーン)に保管されていたものである。
- (6) 一三世紀の北イラクにおけるエヴァグリオスの影響については、Gerrit Reinink, "'Origenism" in Thirteenth-Century Northern Iraq", in *After Bardaisan. Studies on Continuity and Change in Syriac Christianity in Honour of Professor Han J.W. Drijvers*, ed. G.J. Reinink & A.C. Klugkist, Leuven: Peeters & Department Oosterse Studies, 1999, p. 237-252 参照。
- (7) Stewart, "Evagrius beyond Byzantium" 参照。ステューワート博士 Hill Museum and Monastic Library が中東地域で進めている写本の電子化プロジェクトのリーダーでもある。
- (8) シリア語の修道文学集成写本については Herman Teule, «Les compilations monastiques syriaques», dans *Symposium Syriacum VII*, ed. René Lavenant, Roma: Pontificio Istituto Orientale, 1998, p. 249-264 参照。
- (9) ババイ『タノーシスの諸章註解』は、同『ステクンマタ

註解』とよもに、それぞれ W. Frankenberg, *Evagrius Ponticus* (Abh. der königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, N.F. XIII.2), Berlin, 1912, p.8—423, p.422—471 に収録。ハルイエブローヨウの註解の日本版として *Frašo d-me awoto d-qadišo mur Evagrius inidoyo byad Diyomusiyos Ya'qob bar Salibi mtr'qpalito d-Omid* (Yuliyos Çiçek 譯), Glane/Losser, 1991 (複製版) Dionysius Bar Salibi, *A Commentary on the 100 Theses of Evagrius Ponticus*, Piscataway: Gorgias Press, 2010) がある(筆名は未記)。

(10) Emiliano Frano, “È lui che mi ha donato la conoscenza senza menzogna» (Sap. 7,17): Origene, Evagrìo, Dionigi e la figura del maestro nel *Discorso sulla vita spirituale* di Sergio di Reš'ayna”, *Adamantius*, 15 (2009), p. 43-59 参照。また、セルギオスは『ゲノーシスの諸章』の完全訳の翻訳者でもあると推測されている。

(11) イサクにおけるエヴァアグリオスの影響については Sebastian Brock, “Discerning the Evagrìan in the writings of Isaac of Nineveh: a preliminary investigation”, *Adamantius*, 15 (2009), p. 60-72 及び Sabino Chialà, “Evagrìo il Pontico negli scritti di Isacco di Nimive”, *Adamantius*, 15 (2009), p. 73-84 参照。

(12) 『エホロテオスの書』について Karl Pinggera,

All-Erleuchtung und All-Einheit. Studien zum Buch des heiligen Hierotheos' und seiner Rezeption in der syrisch-orthodoxen Theologie, Wiesbaden: Reichert, 2002 参照。

(13) ハルイエブローヨウ『鳩の書』第四章。該当箇所は 註として A. J. Wensinck, *Bar Hebraeus's Book of the Dove*, Leyden: Brill, 1919, p. 61 及び Brian E. Colless, *The Wisdom of the Parlers. An Anthology of Syriac Christian Mysticism*, Kalamazoo: Cistercian Publications, 2008, p. 173 参照。

(14) ハルイエブローヨウの作品におけるエヴァアグリオスからの引用については Herman Teule, “Christian Spiritual Sources in Barhebraeus' *Ethicon* and the Book of the Dove”, *Journal of Eastern Christian Studies*, 60 (2008), p. 333-354 (hic 336-341) 参照。

(15) 他のシリア語写本でエヴァアグリオスの作品とされているものとして Add. 14578 には含まれていないものとして Add. 14621 及び Add. 7198 でエヴァアグリオスの著作群の最後に収録されている *Doctrina* (CPG2474) 及び *Capitula paraneitica* (CPG2480) の一節(これを偽作)を挙げている。

(16) この記述は William Wright, *Catalogue of the Syriac Manuscripts in the British Museum*, London, 1870-72, vol. 2, p. 445-449 及び Paul Géhin, «En marge de la

- constitution», Appendice I : Analyse de l'Additional 14578
にその分析を述べる。
- (17) *Claavis Patrum Graecorum*, vol. II, cura et studio Mauriti
Geerd, Turnhout: Brepols, 1974, p. 78-97 444 頁
Supplementum, cura et studio M. Geerd et J. Noret,
Turnhout: Brepols, 1998, p. 77-82.
- (18) エヴァグリオス作品のマニアック語訳について 44
Samir Kh. Samir, «Évagre le Pontique dans la tradition
arabo-copte», dans *Actes du VI^e Congrès Copte*, tome 2, éd.
M. Rassart-Debergh & J. Ries, Louvain-la-Neuve: Institut
Orientaliste de l'Université Catholique de Louvain, 1992, p.
123-153 445 頁 Paul Géhin, «La tradition arabe d'Évagre
le Pontique», *Collectanea Christiana Orientalia* 3 (2006), 83
-104 参照。
- (19) 以下の記述は Gérard Troupeau, *Catalogue des manuscrits
arabes*, Ire partie. Manuscrits chrétiens, tome 1, Paris:
Bibliothèque nationale, 1972, p. 133-134 446 頁 Samir
«Évagre le Pontique dans la tradition arabo-copte», Géhin,
«La tradition arabe d'Évagre le Pontique», p. 86-88 に依る。
- (20) ダイル・アッヒスルヤーン版での題名は「靈魂の八の情
念 (awḡān) について」。
- (21) ダイル・アッヒスルヤーン版での題名は「悪魔たちの
闘いに有益な言葉」。
- (22) Samir, «Évagre le Pontique dans la tradition arabo-copte»,
p. 143-147 447 頁 Paul Géhin, «Evagriana d'un manuscrit
basilien (Vaticanus gr. 2028; olim Bastianus 67», Le Muséeon,
109 (1996), p. 59-85 参照。
- (23) Géhin, «La tradition arabe d'Évagre le Pontique», p. 88 参
照。
- (24) Irénée Hausherr, «Le De Oratione d'Évagre le Pontique
en syriaque et en arabe», *Orientalia Christiana Periodica*, 5
(1939), p. 7-71. それぞれの訳が収録された写本は以
下のとおり。シリア語訳 A' 大英図書館 Add. 14578, fol.
112r-113v (9世紀) / Add. 14621, fol. 121r-122v (1011
年) / Add. 17168, fol. 30v-33r (9世紀) / Add. 12167, fol.
128v-130v (1016年) / Add. 7190, fol. 56r-57v (11世紀
紀) / Add. 14541, fol. 50r (16-7世紀) 断片) / バチカン
図書館 syr. 126, fol. 249r-249v (1111-1133年)。アラビア語
訳 A' コプト教会総大司教座、番号不明 (1764年) /
フランス国立図書館 arab. 157, fol. 35v-53r (14世紀)
/ バチカン図書館 arab. 93, fol. 33v-48r (14世紀) / ター
ル・アッヒスルヤーン ' 174 「刊本」 p. 55-80。
- (25) Paul Géhin, «Les versions syriaques et arabes des
Chapitres sur la prière d'Évagre le Pontique : quelques
données nouvelles», dans *Les syriaques transmetteurs
de civilisations. L'expérience du Bilad el-Sham à l'époque*

- omeyade* (Patrimoine Syriacque: Actes du Colloque IX), Antélias: Centre d'Études et de Recherches Orientales (CERO), 2005, p. 179–197. 収録写本は以下のとおり。シリア語訳B'ライテン大学図書館 or 2346 [de Goejel] (Heb. Warner 57), fasc. 34, fol. 7v. (一〇一―一章の☆) シナイ、聖カタリナ修道院 Syr. M37N (1062) 一四―一九章 (Paul Géhin, «Fragments patristiques syriaques des Nouvelles découvertes du Sinai», *Collectanea Christiana Orientalia*, 6 [2009], p. 67–93 [hic p. 81] Philothéa de Sinai, «Les nouveaux manuscrits syriaques du Mont Sinai», *III^e Symposium Syriacum*, ed. R. Lavenant, Roma: Pont. Institutum Orientalium Studiorum, 1983, p. 333–339 [hic p. 337] 参照)。マラビマ語訳B' 聖カタリナ修道院 arab. 329, 256v–267v (一〇世紀c.) 同 arab. 549, 62v–84v (一〇世紀c.) 同 arab. 237 (一三世紀c.)。マラマ語訳C' ストラスブール国立・大学図書館 4225 (九〇一年断片, 全四三章)。なお、最近存在が確認された『祈りについて』のクルジア語訳もシリア語訳B'に由来するものと報告されている (Géhin, «Les versions syriaques et arabe», p. 195; «Fragments patristiques», p. 81)。
- (26) Victor Arras, *Geronicon* (CSCO 476–77, aethiop. 79–80), Lovanii: Peeters, 1986, textus p. 166, versio p. 112–113.
- (27) 『祈りについて』の収録箇所は Philokalia tôn hierôn nepi-kôn ..., tomos A, Athênai: Ekdotikos Oikos "Asthér", 1982, p. 175–189 など PG79.1165–1200 など 『祈りについて』の学術的な校訂版としては、シリア語訳やマラビマ語訳なども利用した版を Paul Géhin が準備中である(叢書 Sources chrétiennes に収録予定)。
- (28) Géhin, «La tradition arabe d'Évagre le Pontique», p. 99–100 参照。
- (29) Robert E. Sinkewicz, *Evagrius of Pontus. The Greek Ascetic Corpus*, Oxford: Oxford University Press, 2003, p. 183–209, 274–284; Augustine Casiday, *Evagrius Ponticus*, London: Routledge, 2006, p. 185–201, 233–237 など。ただ、Pascale-Dominique Nau, *Evagre le Pontique. Sur la prière*, Rome, 2010 などギリシア版のみを使用しているようである。